独立ノート

ANNUAL DOKURITSU note

No. 10 2021

■独立レジェンド／坂本善三
■キーパーソン／石井武夫が語る
■アトリエ探偵団／瀬川富紀男

第88回独立展地方巡回展（予定）

大阪展／大阪市立美術館
2021年11月23日（火）ー28日（日）

京都展／京都市京セラ美術館
2021年12月7日（火）ー12日（日）

名古屋展／愛知県立美術館
2022年2月15日（火）ー20日（日）

福岡展／福岡県立美術館
2022年3月8日（火）ー13日（日）

第89回独立展 予告！

2022年10月19日（水）ー31日（月）
国立新美術館
搬入日／10月6日・7日

独立春季新人選抜展 予告！

2022年3月25日（金）ー31日（木）
東京都美術館

詳しくは独立展ホームページまで！ ▶http://www.dokuritsuten.com

独立ノート第10号

発行日／2021年10月1日
発行者／独立美術協会
〒141-0031 東京都品川区西五反田2-13-8-507
Tel.03-3490-5881　Fax.03-6420-0026
E-mail.dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp
URL.http://www.dokuritsuten.com
印刷／エーワンネットワーク・デザイン／八武崎勢津美

ー編集後記ー

今夏、アスリート達の鍛え上げた身体と技、極限まで頑張る姿が感動を呼び、私達は、コロナ禍の閉塞感の中で、明日へと向かうエネルギーを少なからず貰いました。
大雨による各地の災害、そして感染症拡大のため見通しが立たない状況下でも、粘り強く立ちあがる熱意を、未来へ繋げて行きたいものです。「独立ノート10号」をお届けいたします。

独立美術協会小史

【誕生ー初期】(1930ー1959) 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。
初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960ー1984) 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985ー) 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。
一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。
独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。
批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。

独立ノート第10号　発刊にあたり

今もってコロナの影響の中にいます。ウィルスと共生していくような時代に入ったと言えます。東京オリンピック・パラリンピック・コロナ以後の日本はどうなりますか、見届ける必要があります。
このスポーツに対するエネルギーの百分の一でも文化に配慮して頂けたら日本は変わるでしょう。
私達は絵の力を信じ、美のエネルギーでいっぱいの作品で埋め尽くされ、輝くハレ舞台になるように皆で「独立」を創っていきましょう。

事務所委員　吉武研司

目次

- 独立美術協会小史 ―― 表紙裏
- 独立ノート第10号発刊にあたり ―― 1
- 独立レジェンド／坂本善三 ―― 2
- 独立キーパーソン／石井武夫 ―― 4
- アトリエ探偵団／瀬川富紀男 ―― 6
- つぶやき生の声！ ―― 8
- 特集！独立賞のころ ―― 10
- 独立ホットニュース ―― 12
- 独立人ーひとりたつひとー／田伏勉 ―― 13
- 第88回独立展地方巡回展予定 ―― 裏表紙
  第89回独立展予告

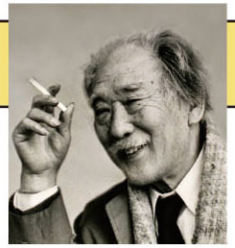
制作:独立ノート編集室
阿部栄一　井上達也　加藤啓治　北島治樹　関口聖子
津川めぐ美　佃彰一郎　松原潤
協力:キャラクター制作/齋藤将　画像提供/千葉光
表紙:坂本善三「黒の空間」162×162cm 1980年 坂本善三美術館収蔵
＊新聞紙上で“渓流の深い淵の小魚の群れ”と語っている。

独立ノート
DOKURITSU note
No. 10
2021

坂本善三の言葉
「自分の生まれ、住んでいるところから出てくるものを描くほかに自分の表現は成り立たない」

グレーの画家 東洋の寡黙

坂本善三 さかもと ぜんぞう Zenzo SAKAMOTO



抽象表現の画家として、日本の精神的造形や風土の美しさの表現をテーマとし、古くから日本人が暮らしの中で生み出してきた形の美を追求した。

1911年熊本県阿蘇郡小国町に生まれ、豊かな大自然の中で善三少年は育った。画家を志し上京したが帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)中退後10年間で三度召集され兵役に就いた。1945年34歳の時には、それまでの全作品を戦災で焼失している。

終戦後阿蘇に帰郷、静物を中心にキュビズムの研究に没頭した。独立賞受賞(1947年)、会員推挙(1949年)もこの頃であった。坂本は阿蘇の大自然の中で,調子について深く考察し、画面構成上の等価値を学んだ。

しかし、またしても1953年42歳の時熊本大水害で、独立賞受賞作品はじめ、戦後の大部分の作品を消失した。それでも求道者のように画業に邁進する坂本は1957年～59年、ヨーロッパ歴訪の旅へ出た。その旅で人々の存在感や建築物の構造性を学び、絵にも構造性を求めるようになり画風は、単純化から次第に抽象表現に向かった。

帰国後、海老原喜之助との対談の中で「絵具とキャンバスの交歓の中、何かが作用して出来たマチエール」について述べている。この物質と心との化学反応で生まれたマチエールを、精神マチエールと名付け、表現の大切な要素のひとつとした。等価値の造形理論は、抽象表現では描かれる部分と描かれない部分は等しく価値があると応用した。作品はこの理論により厳密に構成されているため、心地良い緊張感がある。線は山の端や水切りした和紙の線、垂直線は真っすぐに伸びた小国杉、水平線は田畑の畔の線をイメージし形を造った。際の処理に深みが感じられるのはそのためである。日本の生活の中にある形を等価値の造形理論で構成し、山里のイメージの線で形取り、精神性の深さを伴い描いた作品は、見る人の心情を静かに深く温かくする。

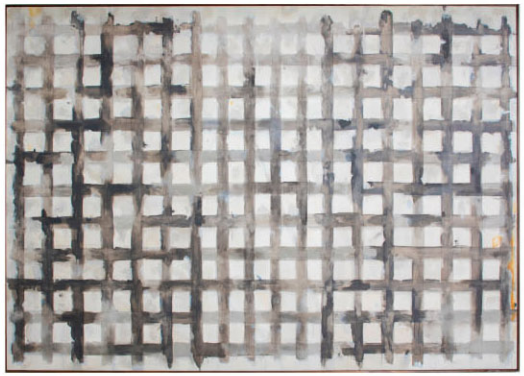
「形」165.5×256.0cm 1965年 坂本善三美術館収蔵

「相似」(リトグラフ)56.8×41.8cm 1976年 坂本善三美術館収蔵

真摯な人柄には多大な信頼が寄せられ1973年から5期10年間熊本県美術家連盟会長の要職を務めた。1980年からはリトグラフィの制作を開始、パリの画廊やグランパレなどの企画展に出品、高い評価を得た。

日本の美を追求した坂本善三は1987年逝去、76歳であった。晩年の格子状の「作品82」は生誕地のすぐ近くにある神社の格子を描いている。坂本芸術の完結を「自分が生まれ住んだところ」に報告しているようである。

「出来事」181.8×258.6cm 1955年 坂本善三美術館収蔵



「作品82」182.5×259.2cm 1982年 坂本善三美術館収蔵

"風土のかたち"

独立美術協会会員 松永 久

坂本先生に初めてお会いしたのは、先生が四国八十八カ所巡礼の旅から数年経った頃で、旧都美術館でした。独立クロニクルに白野先生と対話をされながら、私の作品を取り上げてくださいました。その時の感動は、今も制作の糧になっています。更に坂本・杢田・江田・白野諸先生方の「４人展」では刺激を受けてきました。中でも坂本先生は、生涯熊本の風土の中で制作され、「どんな秩序も自然の中の秩序には及ばない」、「空・山・家々は全て等価値である」という絵画理念を貫かれました。私はその心の形の作品群から、自己の課題を掘り下げる大切さを学びました。坂本善三美術館の畳が敷かれた空間で、先生の作品と対峙することが、今の願いです。

●坂本善三美術館

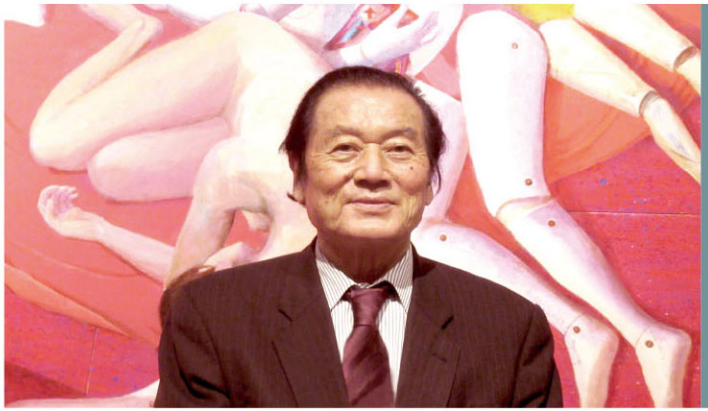
坂本善三が愛した生地、鉾納社に隣接する小国の地に古民家(明治初期の建築)を移設し、全国唯一の全館畳敷きの美術館として、平成7年に開館しました。

〒869-2502 熊本県阿蘇郡小国町黒渕2877
TEL 0967-46-5732　URL http://www.sakamotozenzo.com/

春爛漫の4月、千葉県松戸市のアトリエに伺いました。池田20世紀美術館での個展でお忙しい中、興味深いお話をお聞きすることが出来ました。

石井武夫が語る

いしい たけお　Takeo ISHII



1940 千葉県茂原市に生まれる
1964 東京教育大学(現・筑波大学)
教育学専攻科芸術専攻修了
1977 第20回安井賞展/佳作賞受賞
1980 第48回独立展/独立賞受賞
1981 筑波大学助教授、後に教授就任
第49回独立展/独立美術協会会員推挙
1999 文化庁派遣芸術家在外研修/パリ国立高等美術学校
2004 石井武夫教授退官記念展/茨城県つくば美術館
大阪芸術大学教授就任
2010 石井武夫教授退任記念展/大阪芸術大学情報センター
2021 石井武夫展/池田20世紀美術館
現在 独立美術協会会員・筑波大学名誉教授

幼少期・絵画への志

昭和18年、私が3歳の頃に陸軍の要請で生家や所有地が接収され、父の実家のある茂原市長尾に引っ越すことになりました。知る人もいない田舎でしたが、そこでの経験は新鮮で強く記憶に残っています。蜘蛛の生態を調べる、新聞紙と針金を用いて恐竜作りに没頭するなど、好奇心旺盛で製作することが大好きな子どもでした。父は青年期に画家を志したこともある教員で、家にあった世界美術全集(平凡社)を見て幼い頃から西洋絵画に興味と衝撃を覚えたものでした。高校生の頃、父から絵を描くことと生活することの両立を教えられたことや高校美術部の教師二人からの影響もあり、絵を描きながら、美術教師として働くことを考えて東京教育大学(現・筑波大学)に進学しました。

高校教諭の時代

1964年、専修大学松戸高校に美術教師として赴任しました。当時は身辺に起こる厳しい出来事のために精神的に最も苦しい時期だったこともあり、時には苛立つ私の行動に対して同僚の先生方が温かく接してくださったことはとても有り難いことでした。また悪戦苦闘の状況の中で安井賞展での佳作賞受賞や独立展での受賞からは大きな力を頂きました。教師としての面白さは生徒が伸びる力を自ら発見することにあります。音楽教師とともにクラシック音楽とアクションペインティングとのコラボによる授業実践や、その後の生徒の成長など、楽しかった記憶に溢れる教員時代でした。

文化庁派遣芸術家在外研修

1981年より筑波大学に勤務となりましたが、1999年9月から12月迄の間、文化庁派遣としてフランスのパリ国立高等美術学校に留学する機会に恵まれました。ここでは卵ではなくメチルセルロースを用いてテンペラを開発した原理を習いました。パスキンの親戚にあたる教授にはとても良くしていただき、休日には旅行に誘われることもありましたが、短期留学のため、ひたすら真面目に学校に通う毎日でした。留学生たちは皆素朴で、それぞれのお国柄による気質の違いは興味深く、楽しい思い出が残っています。学校にはローマ賞を受賞した作品などが倉庫に大量に保管され、修復の現場を見ることができたことも貴重な経験でした。

新婚の頃
(アトリエにて)

ダミーと今後の制作

1976年、私は長女(彩子:5歳)を脳腫瘍のために亡くし、その出来事が制作の転機となり、<ダミー>シリーズの出発点となりました。最期の時、彼女の少ない呼吸に私も息を合わせ「ゆっくり息をしようね」と傍らで共に生きていることを知らせるだけ。今自分に起こっていることを何も知らず恐怖心もなく幸せな表情でした。私はその表情を残したいと思いスケッチをしました。以後、今日に至るまで、生きることに対する真剣さ、人間とは何かというテーマをダミーに託して探しています。真に生きていること、クリエイトすることが最大の価値あるものと考える生の哲学(ベルクソン)の思考も支えとなります。今後の制作について、80歳を超えて生きる実感を想像すらしていなかったので興味深く、死を身近なものとして作品化していけるのか期待と不安に満ちています。独立展に期待することは、今後もその名の精神<独立>を会員及び出品者一人一人が保つことです。

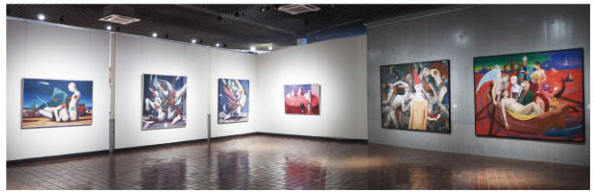
「落ちるダミー2」100S 1978年

「ダミー5」100F 1980年

生死(しょうじ)を超えて ダミーが観(み)た世界

石井武夫展

会場：池田20世紀美術館
会期：2021年4月1日(木)－6月22日(火)



画業60年、初期の作品から最新作の大作迄の39点を展示しました。孫が生まれ、次世代に生命を繋ぐイメージが現れ、楽天的で明るい色彩を使用するなど80歳近くになって作調が変わったことが会場に並べてみてわかりました。土方明司氏の論評では、1975年の親しかった同僚の突然死という出来事とダミーというテーマとの繋がりを分析され、作品化への模索を考察してくださいました。私という絵を描く人間についてこのように多面的な紹介を頂いた池田20世紀美術館に深く感謝を致します。

「まつりの街角」100F 2017年

「船つき場」200F 2017年

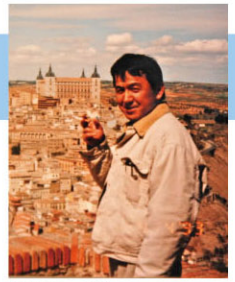
「ダミーと道化」200F 1982年

atelier - TANTEIDAN
アトリエ探偵団

瀬川富紀男

せがわふきお
Fukio SEGAWA

綾瀬駅から徒歩6分、閑静な住宅街に建つ瀬川会員のアトリエは、広い空間を造り強度も高い重量鉄骨工法による3階建ての建物で、室内に入り天井を見上げると頑丈な建物であることが分かる。
３階は気儘な居室。１階と2階は、ゆったりとしたワンルームで、１階は絵画専用。2階は、電動ろくろや陶芸窯が据え付けられた陶芸のためのアトリエである。



留学中の旅先で
スペイン・古都トレド
旧市街を見渡せる丘にて

「鏡考-あやとり」130号 1989年 第32回安井賞展 佳作賞受賞作

「ボディビルダー」200号 2018年

略歴

1949 熊本県菊池市に生まれる
1976 東京藝術大学卒業 大橋賞受賞
1977 第45回独立展出品　以後毎年出品　中山賞受賞('80)
1978 東京藝術大学大学院修了
1982 第50回独立展/記念賞受賞、第55回記念賞受賞('87)
1984 第52回独立展/独立賞受賞('86)　(会員推挙'87)
1989 第32回安井賞展/佳作賞受賞
1991 第26回昭和会展/優秀賞受賞
1992 文化庁芸術家在外派遣研修 パリ,ボ・ザール留学
1993 ル・サロン(グランパレ美術館)出品
1997 第1回独楽の会展出品 (～2001年)
2009 第31回十果会展出品 以後毎年
現在 独立美術協会会員

つぶやき生の声

コロナ禍の収束しない日々も、それぞれを見つめる時間となり、
制作への想いは続いています。今回は比較的長く独立展に
出品されている方々に、つぶやいていただきました。

独立展への初出品は2007年。
会期が近づく秋口になると高揚感を持ち、
鹿児島空港から乃木坂駅に向かう道中は、
まだ見ぬ独立の作品群に胸を躍らせ
自分を振り返る時間。
最も幸せなひとときかも知れません。
ー 山下晴道 鹿児島 ー

今、コロナ禍で作品発表の
機会が失われている。
皆さんに知恵を絞っていただき、
この状況下でも独立展を
開催できる方法をさぐって欲しい。
ー 松村 豊 島根 ー

命をテーマに描いては壊す。
壊しては描く。
意図して壊すことは、
私の制作の原点です。
ー 目次隆志 島根 ー

日常生活での感動、興味や刺激を受けたことを
自分の胸に問いかけ絵画に表現したい。
守りに入らず可能性に目を向けたい。
ー 亀谷千春 神奈川 ー

大正浪漫に憧れて男装させた
妹や友達をモデルに描いています。
独立展に自分の作品を並べていただける時、
誇らしくて嬉しくてこれ以上の幸せはありません。
ー 阿部琴絵 東京 ー

1963年独立展に初出品。
86歳の爺サマです。
独立展に応募し続けたおかげで、
どうにか今の気力、
体力を保っています。
“ありがたいことです”
ー 本村徹郎 熊本 ー

時と共に技法は開発され
新しい世界を発見。
今絵画の世界にも
AIの波が現れ利用できる。
ー こやなぎのぶお 佐賀 ー

描き急いで
30歳で亡くなった佐伯祐三、
大好きだった。
若冲は40歳から本格的絵師となった。
時間の流れは濃厚濃密具合と
比例しない。
最近私はじっくりと描き続けたいと
思うようになった。
ー 中川美登里 神奈川 ー

独立展には大学2回生の時より出品し
48回陳列をしてもらいました。
「農具と農夫」をテーマにして
小規模農家の悲哀を
社会派的主張をしてきましたが
齢と共に身のまわりの環境が
厳しくなってきて、終了符を打つ時が
近づいていると思っています。
ー 石浦啓二郎 京都 ー

昨年1年間の休養終了。
夫の介護生活も5年になりますが、
自身を見つめ直す機会を与えて貰い、
やはり私は絵を描くのが
好きだと実感しています。
今を生きる絵をコツコツと！
ー 桑野幾子 石川 ー

十代の頃から中村節也先生に
切符を頂き毎年独立展を見に行きました。
この度準会員に推挙頂き、
一番に報告したい先生も両親も
今は亡く残念ですが「精神のある絵を」と
おっしゃった先生のお気持ちを忘れず
精進したく思って居ります。
ー 田中明子 群馬 ー

日常の何気ない人々の様子を描いています。
翻って世の中を見渡しますと
イスラエルとパレスチナの紛争、
コロナ禍で亡くなる人々が世界中に生じています。
「平和」というキーワードを大切にしたいです。
ー 吉川信ー 富山 ー

「飛行機」というかたちを
描きつつコロナ禍の中で
「祈り」や「願い」の気持ちを
持たずにはいられません。
ー 和田道雄 広島 ー

白野先生との会話の中、
数々の言葉で絵を
描くことのよろこびを
教えて頂きました。
ー 亀井政子 埼玉 ー

18mの壁面に
200号の「靴の塚」を中心に
「はな一代記」12点を巨大絵画として
発表することがきた。
これを土台にして
未来に通じる自分の表現を
していきたい。
ー 伊藤 宏 三重 ー

絵具の色や技法など自分なりの
こだわりを持ち制作しています。
そんな中でも消えた生命と今動いている
生命にこだわりを持ち“現在”を表現しています。
ー 坂元紀雄 宮崎 ー

一雨毎に草は生い茂り草を毟れば
虫たちが右往左往。虫や鳥や蛙やミミズ‥
すぐそこにある無数の命と営みの不思議。
コロナ禍の私達に自然界がつきつけているものは何？
ー 渡辺通子 北海道 ー

独立展が大好きだ！
しかし中々納得のいく作品が出来ない。
「あんた長いこと独立出して何を求めているの？
友達探しのため？」と家内は言う。
そんなバカな！
人や作品を介して刺激を受けることも
制作には大切や！
ー 福井満 大阪 ー

これから夏、制作のかたわら音楽を聴き本を読もうと…
題名「プログラム Fill and empty」という
私の考えは又続いて行きます。
ー 四方倍子 京都 ー

朝からの制作で、
大リーグの大谷選手に邪魔され、
久しぶりの邪魔(感動)で
テレビに釘付け！
このままだと作品が
本展に間に合わない。
方向転換中?!
ー 榎本悦明 東京 ー

独立展を担う中堅会員に、独立賞の思い出を語っていただきました。

ー「地獄の賞レース」ー

梅野 顕司

「春宵」1989年

● 略歴 ●
1962 千葉県生まれ
1988 東京芸術大学卒 サロン・ド・プランタン賞受賞
第56回独立展/安田火災美術財団奨励賞受賞
1989 第57回独立展/独立賞受賞
1990 安井賞展出品('91)
1993 東京芸術大学大学院後期博士課程満期退学
1994 第62回独立展/会員推挙

初出品は、大学4年。力試しにと、気紛れに出した独立展も、早35年。我ながら、良く続いたもんだと思う。これも、手強いライバル達、優しい先輩方、ちょっと怖い先生方(当時は)のお陰と感謝。
取り敢えず、と飛び込んでみた公募団体展、賞を取らないことには会員にしてもらえないシステムとは、つゆ知らず。自動的に、地獄の賞レースに両脚どっぷり。元来、他人と競い合うのが苦手な性格。だけど、ありがたいことに、すぐに独立賞いただいた。
でも、本当の地獄は、そこからだった。自分の方向性を見失い、会員に推挙いただいてからも、自分が何者か分らず迷走地獄。迷走しながらも、毎年独立展はやって来る。

200号と向かい合って四半世紀超。
やっと、ここ4,5年、地獄から抜け出しつつあるような。

ー「親」ー

堀井 克代

「華の玄室Ⅱ」1976年

● 略歴 ●
1938 奈良県生まれ
1961 奈良学芸大学芸術学科絵画専攻卒業
1963 第31回独立展/初入選　以後毎回出品
1974 独立展選抜展/選抜展賞受賞
第42回独立展/独立賞受賞('75)
1976 第44回独立展/会員推挙
文化庁現代美術選抜展
2011 第79回独立展/会員功労賞受賞

学校の帰りに100号が乗る大きいイーゼルを買って帰りました。それは私が帰る前に玄関に到着していました。私の顔を見るなり「お前は画家になるつもりか!!!」と父が大声で怒鳴りました。「父も私が生まれる前に本一冊を書き上げているくせに」と口から出そうになり、グッとおさえました。
それから、16回目となる個展を二か所に分かれてやりました。父は友人達に案内状を渡し、来てもらうように働きかけていました。父は遠くから様子を見ているように見えました。文化会館は広いから遠くからでもと思ったのでしょうか。
母も来てくれました。母には大変叱られました。それは好物のお茶を飲んでいただくのを忘れたのです。「お茶ぐらいは欲しかった」と叱られたのです。私はこの母に支えられて大きく成長出来たのに、どうして察することができなかったのかということを思い出し、今は後悔の念で一杯です。

２年に１回個展をして充実感を持ち、失敗に気付き、くたばることも恐れずに、まだまだ描き続けるのです。

ー「独立賞のころ」ー

山本 雄三

「秩序のない食卓」2000年

● 略歴 ●
1964 鳥取県生まれ
1991 武蔵野美術大学大学院修了
1998 第66回独立展/新人賞受賞
2000 第68回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
2002 昭和会展/日動火災賞受賞
2009 第28回損保ジャパン美術財団選抜奨励賞展/秀作賞受賞
2010 第8回前田寛治大賞展/大賞受賞
現在 女子美術大学短期大学部教授

大学院を修了後に就職した私は、仕事と制作の両立が難しくなり、独立展に１点出品するのが精一杯でした。
サラリーマンをしながら、細々と制作を続ける中、徐々に後輩や同級生が作家として活躍する様子を目の当たりにするようになった私は、５年で脱サラをしてカルチャースクールの講師を始め、生活の中心を制作へと移しました。その甲斐もあってか、翌年、制作のスタイルをガラッと変えて初めて３点出品し、結果、新人賞を受賞させて頂く事が出来ました。
それまで、毎年、なんとか1点を出品し、入選がやっとの私でしたから、その時の作品は、審査員の先生方には初見に近い印象だったと思います。正直、独立賞を受賞した時よりも嬉しかったことを憶えています。

ー「あこがれの独立賞」ー

輪島 進一

「パスカルとデカルト」1996年

● 略歴 ●
1951 北海道函館市生まれ
1979 安井賞展('84'85'89)
1981 第3回明日への具象展(高島屋)
1983 第17回文化庁現代美術選抜展('98)
1984～1988 (毎年) 日本青年画家展(三越)
1995 北海道教育大学大学院修士課程修了
1996 第64回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
2007 網走市政60周年記念企画・輪島進一展
2008 新宿・紀伊国屋画廊企画個展

45回展初出品。翌46回展で奨励賞、その4年後に50周年記念賞をいただいた。
安井賞展選抜や高島屋や三越の企画展へも招待され、イケイケどんどんすぐ独立賞だと息巻いていた30歳の頃、同時に勤めていた高校教員の仕事も学級担任になったりと多忙を極め、どちらを取るかを迫られた。
結婚し立てだったし、結局生活のために教員を続けた。制作時間は削られ、満足に制作できないことも。無理をして1度体調不良で不出品もあった。ようやく独立賞受賞を果たしたのは15年後64回展、45歳の時だった。
しかしこの期間によって死ぬまで粘り強く制作を続けることへの覚悟と根性が培われたのでないかと思っている。

【第88回独立展オリジナルポスター！】

〈 今井信吾 〉

〈 白野文敏 〉

〈 馬越陽子 〉

※独立展、会場内にて販売します。
ご希望で郵送します。（送料350円）

●サイン入りポスター：各2,000円（ケース付き）
●サインなしポスター：各1,000円（ケース付き）

【齋藤研賞】 第88回独立展より「齋藤研賞」の個人賞が設置されます。

故齋藤研氏は1967年から独立美術会員として活躍され、「作品は、時代を達観して愛するものたちへの愛や人生へのノスタルジーが謳われています」。ご自身がいつもチャレンジャーであり、若い人たちを応援し、女子美術大学にて後進の指導にも当たりました。飄々としたお人柄が心に残ります。

「花嫁募集中」200号＋130号 2012年

【地方展から】広島・山口 独立グループ展

1935年、小林和作会員が「尾道美術協会」を創設、1949年には「尾道絵画研究所」を開設して、多くの画人たちを指導し独立展出品者も育てました。後の指導者には(故)妹尾・木梨の各会員もいます。1970年頃には「広島独立クラブ」創設、1992年「独立広島グループ」に改名し、(故)妹尾、福島、(故)國清、木梨、島崎の諸会員たちの指導のもと、現在に至ります。独立展の広島巡回展を過去37回開催してきましたが、近年は開催出来ていません。2020年第1回広島・山口独立グループ展はコロナ禍で延期、2021年は漸く開催（シンフォニア岩国）することができました。出品者の研鑽の場として、さらなる発展を期待しています。

田伏 勉

たぶし べん
Ben TABUSHI

1 クレパスとの出会い

一般名称ではオイルパステルと呼ばれる画材、クレパス（登録商標）が出来て96年、私の使っている大人のクレパス「スペシャリスト」が出来てもうすぐ20年です。（株）サクラクレパスとは、画学生の頃、同社の倉庫清掃のアルバイトをしていたのですが、画材など山積みの商品が焼却処分と聞き、それを貰い受けて使った懐かしい時代を経て、現在ではカルチャーの講師としてご縁が続いています。そして、「スペシャリスト」が出来た時に、一度使ってくださいと88色のセットをいただいたのが始まりでした。それまではスケッチ用の色鉛筆と変わらない感覚でしたが、「スペシャリスト」は、油絵具で使うテクニックがほとんど使えると判り、思い切って大作で試そうと独立展で挑戦！しかし誰もクレパスとは気付きませんでした。そして表現材料として体質に合えば使えると確信しました。その後、専用のフキサチーフが出来、劣化も紙以外は無いようで、耐久性もあり画材として凄い。2021年6月には産経新聞紙上にてクレパスの技法講座を担当、現在はクレパスでないと描けない作品を研究しています。

「風のように」130F 1990年 会員推挙

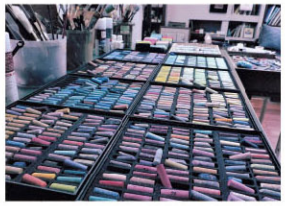
2 制作テーマ

人々の生活や日常、さらに過ぎ去る時間と自分の周辺が、制作テーマです。よくフランスを旅しますが、数十年前から旅で出合った駅風景や人物を描くようになりました。フランスの田舎には駅舎それぞれの美しさがあり、利用する人々の人生も含めた景色を重ね、そこから伸びてゆく線路の先は何が待っているのかなどと想像しながら描いています。私が画家を志したのは小学生の頃。キャンバスに向う年老いた画家の背中が夢に出て来たのです。次の日、親に画家になると宣言！反対にぶつかりましたが、当然全く迷いはなく…子供の頃にかかった魔法！どんな遊びよりも楽しかった、その魔法が未だ解けていません。

左
「サイロのある駅」150F 2014年

中
クレパス 880色

右
「シャルトル」4F



1949 大阪府に生まれる
1972 大阪市立美術研究所卒業（特待生、助講師）
1980 ～安井賞展・文化庁現代美術選抜展・上野の森大賞展
昭和会展・日伯現代美術展・セントラル油彩大賞展
1989 第57回独立展/独立賞受賞（翌年、会員推挙）
1993 アートレッスンビデオ出版/ターレンスジャパン
1999 化粧まわしデザイン担当/大関出島（武蔵川部屋）
2003 田伏勉クレパス展/サクラアートミュージアム